

吉井勇の戦中疎開日記
(中) — 「續北陸日記」抄 1

細
川
光
洋

【翻刻】

吉井勇の戦中疎開日記（中）——「續北陸日記」抄 1

細川 光洋

京都府立京都学・歴史館（旧京都府立総合資料館）の吉井勇（一八六〇～一九六〇）資料には、戦時下の吉井勇日記として「洛東日録」「北陸日記」「續北陸日記」の三篇（ノート二冊）が残されている。これらの日記や手帖は長らく出納不可であったが、二〇一五年秋より研究目的での特別閲覧が認められ、稿者は関係者の諒解の下に調査を続けている。戦時下の日記三篇は、B6判ノート二冊に縦書きでペン書きされている（題字は毛筆縦書き）。その内容及び執筆時期は次の通りである。

【洛東日録／北陸日記】 緑背ノート1（資料番号2455）

「洛東日録」京都岡崎円勝寺への移転から富山八尾に疎開するまでの記録（昭和19・9・20～昭和20・2・8）。

「北陸日記」常松寺仮寓期を中心とした八尾時代前半の記録（昭和20・2・9～6・23）

【續北陸日記】茶背ノート2（資料番号2456）

「續北陸日記」小谷契月居に仮寓した八尾時代後半から終戦を経て京都八幡の宝青庵に入居するまでの記録（昭和20・6・23～10・26）。

八尾での疎開時代について、吉井勇は後年『私の履歴書』^[1]の中で次のように語っている。

「疎開して行った先の越中八尾も、また安住の地ではなかった。私たちは二階の上まで雪に埋もれた北国の町に来て、宿屋や寺や友人の家や、落ちつくところもなく転々としていたが、そのうち雪が消えて春になると、今度は人情の酷薄に悩まされなければならなかった。／＼しかし、その間のことは、いまさらあらためて書きたくない」

戦争末期の八尾疎開時代は、徳子前夫人の関係した「不良華族事件」に端を発する土佐流離時代（昭和9・4～昭和13・10）とともに、勇がその人生において最も苦汁を嘗めた時期であった。この時期、勇は戦後に刊行された歌集『寒行』、『流離抄』に収められる多くの秀歌を詠んでいるが、勇自身が言葉を濁していることもあって、その歌の背景となる疎開生活の実態や各地を転々とした経緯・移転時期などは、これまでほとんど知られていなかった。

今回、「北陸日記」「續北陸日記」を翻刻することで、その日記の記述より、各所への移転時期・仮寓期間が次のように明らかになった。作品の成立事情を考え、書簡資料との照合を行う上でも基軸となるものであろう。

【吉井勇 八尾 仮寓先並びに期間一覽】

① 宮田旅館	昭和20・2・10	3・10
② 常松寺	昭和20・3・10	5・31
③ 小谷契月居	昭和20・5・31	8・22
④ 宮田旅館	昭和20・8・22	9・18
*上洛(京都ホテル)	9・18	9・24
⑤ 宮田旅館	昭和20・9・24	10・5

※終戦
※仮寓先決定
※八尾を去る

歌人の戦中疎開日記としては、郷里山形上山かみのやまに疎開した齋藤茂吉の日記が知られている。茂吉の日記は、漢字カタカナ交じりの簡潔な口語文で記されている。これに対し、勇の日記は和漢混交の文語文による日記である。その記述は、時局の動向や日々の出来事の記録のみならず、作歌の覚え書き、読書の記録・感想、手紙の授受、交友関係や朝昼晩それぞれの献立にまで及んでいる。なかでも、いつどのような歌をつくり、どの雑誌・新聞に送ったかという記録は重要である。その中には、多くの戦争詠も含まれている。勇の戦争詠は、戦後に編まれた歌集からことごとく削除され、その発表時期、発表媒体を含めて現在ほとんど知られていない。表だった結社を持たなかった勇は、戦後、茂吉や信綱ほど戦時中の歌についての批判を浴びることがなかったとされるが、戦時下の勇を考える上で、こうした記述は今後の調査の手がかりとなるものである。

今回紹介する「續北陸日記」は、戦争末期から終戦を挟み、京都宝青庵に移るまでの約四ヶ月間の日記である。特にその前半部は、沖繩本島守備軍の玉砕の報から終戦に至

るまでの息詰まるような日々の記録となっており、戦中日記三篇の中でも最も密度の濃い内容となっている。なかでも、八月一日夜半から二日未明にかけての「富山大空襲」の記述は、文学者が書き残した空襲の記録として、また富山の戦時史・地域史としても貴重な証言となるものといえよう。その記録の重要性を鑑み、「續北陸日記」からはなるべく多くを抄録したいと考え、終戦までの前半部と戦後から京都宝青庵に移るまでの後半部と二回に分けて紹介することとした。

なお、今回の「續北陸日記」の翻刻及び本稿執筆にあたっては、「北陸日記」同様にご遺族ならびに所蔵館と連絡を取り合いながら行った。日記には適宜読解の助けとなるよう註を施し、併せて解題を附した。

表記について

本稿では、原則として原本の記載、形式をそのまま再現するように努めた。日付の囲み表示も、原本によるものである。

表記については以下の通りである。

- 一 漢字は、旧字体のものも含めて、可能な限り原本記載の通り表記する。
- 二 変体がな・合字は現行の表記に改める。
- 三 かな遣い、送りがな、拗音・促音の表記は原本記載の通りとする。ただし濁点がなく難読のおそれがある場合は濁点を補う。
- 四 おどり字は、漢字の場合「々」に統一するほか、原本

記載の通りとする。

- 五 振りがな・傍点・傍線は原本記載の通りとする。
- 六 補いうる脱字並びに空白箇所は「」で補う。また、単純な誤字と思われるものには、を附す。
- 七 欄外記載は、各日の記述の後に「右欄外」「左欄外」として示す。勇の日記では欄外指示を概ね×で示してあり、原本記載の通りとした。
- 八 解読ができない文字は□で示し、無理な推測は避けた。
- 九 各日の日記は一続きの文章と見なし、追いつみとした。

翻刻「續北陸日記」

昭和二十年六月

廿五日 雨歇みて霽る。五時半起。久しぶりにて揮毫。川崎氏の画賛七、玉生氏の歌幅二。川崎氏の画賛は新作句。午前、矢倉君より予の著書の小包三個到着。宇野浩二の「高天ヶ原」を読む。おもしろし。午食、昨日貰ひたる菓子麴麴に胡麻蜜をつけて食す。午后、晴れて暑くなる。零時半警戒警報出づ。爆音を聴き空を見れば一個の白点銀の蝶の如く飛翔するを見る。間もなく解除。画賛を携へて川崎氏を訪ふ。牛乳一合を馳走になる。玉生氏を訪ひたるも不在。歌幅を置きて販る。秋路氏を訪ひ閑談。封筒の箱入(五円)二個を求む。鏡湯休みなれば繊維組合に寄り小谷氏等と語

りたる后販寓。途上孝子に會ふ。「北日本新聞」本月第五回の応募歌の予選。庚申湯ありとのことを聴き小谷氏と共にゆく。小ぢんまりとした湯、さまで混雑せず。販りて孝子が宮田より貰ひ来れる一陶の酒を小谷氏と二人にて飲む。晩食、ひじき、菜、味噌汁等。夜、月明。十六夜位ならんか。九時就寢。

〔右欄外〕×この日午后四時半の大本營発表は、沖繩南部の皇軍の玉碎を傳ふ。

廿六日 夜半一時頃警戒警報出づ。敵機敦賀方面に来れるもの如し。間もなく解除。この夜より幘を用ゐたれば安眠するを得たり。五時半起。快晴。北日本新聞の歌の選を了す。午前、玉堂氏より句賛縦幅紙本二点来る。いづれもよき出来。句に曰く「とりあへず叢の百合剪りて活け」「慕ひ寄る雲にほふや夏の月」今日も探偵小説。(マツカリの黒星) 午食、麥こがしをまぶして飯二椀。野趣ありてうまし。午后、秋路氏へ寄り封筒を購ひたる后郵便局にゆき、更に角間に村島君を訪ふ。氷砂糖にて番茶一椀。中根氏も来りて語る。村島君とともに散歩。城ヶ山の上にて仝君と別れ、薊の花を採りて四時頃販宅。山上より立山、劍、薬師等を望み、今更ながらその壯觀に驚く。孝子の作りたる寒天羹を食す。夕刻中部日本の長崎氏来訪。沖繩戦の歌の依頼。戦局に就ての豫想談などを聴く。小谷氏富山より電話。鱈を入手したれば晩食を待てとのこと。探偵小説を讀みつつ待機。八時を過ぎて晩食。鱈の汁、露のうま煮、菜ひたし等。夜、秋路君来る。畑の初ものなりとて馬鈴薯、葱、莢豆、キヤベツを貰ふ。純情感謝に堪へず。鼠を怖れ

幄に入れて寐る。就寤十時。茶の飲み過ぎにや眠屢覚む。
〔右欄外〕×新聞を見るに、沖繩の海軍部隊は十三日、陸軍部隊は三十日に最後の攻撃を行ひ、事後の状況詳らかならざる由。敵に與へたる損害、地上八萬、艦船六百。

〔廿七日〕五時半起。曇。歌をつくる。中部日本の為に「沖繩を思ふ」五首。新聞を見るに、昨日は名古屋、各務ヶ原、京阪神、徳島、和歌山、東北等多方面に敵機の来襲を見たる由。午前、美禰代より孝子宛手紙。千葉の父病状悪しく来月十日頃迄の余命、上京せぬかとのこと。孝子落涙上京の意あるもの如し。いかにせばやと惑ふ。小谷氏の友人川枝氏に面會。全氏は妻、子二人、母、妹の五人を神戸の敵襲にて失へる人。その時の模様など聴く。午食、鉄火味噌、蕎麥等。午后、孝子村島夫人に上京の相談にゆきたるも不在。午睡少時。宇野の「子を貸し屋」「心づくし」等を讀む。今日は遂に一歩も外に出でず。晩食、鱈味噌漬、荳馬鈴薯うま煮、ぜんまい、キヤベツバター焼等。夜、小谷氏夫妻と閑談。獵師の子に猿に似たるものありたる話、藝者の子の尼になりたる話などを聴く。十時頃就寤。熟睡。

〔廿八日〕快眠目覚むれば七時を過ぐ。天も晴れたり。庭前の柿の蒂しきりに落つ。午前、手紙を書く。新聞を見るに敵機は昨日四日市を暴撃したる由。敵襲いよいよ近付きたるの感あり。子規の随筆、宇野の小説などを讀む。少時午睡。午食、麥こがし。午后、寒燈叢書第一篇「高志消息」の編輯にかかる。再び午睡少時。今日は睡気しきりにして懶し。細井、伊庭の両氏に封筒の箱入一個づつを送る。臥讀に時を銷す。今日も終日在宅。晩食、小谷氏より貰ひたる牡丹

餅数個、葱の味噌汁。久しぶりに鯉節の出汁を入れたるに味極めて濃厚。習慣のおそるべきを覚ゆ。夜、小谷氏に立替金を支拂ふ。移轉費用その他にて卅六円廿四銭。閑談の後九時半就寤。この夜もよく眠る。

〔廿九日〕六時起。曇れり。手紙を書く。午前、小谷氏を訪ね来れる川枝氏に會ふ。「高志消息」の編輯に従ふ。十時頃午睡少時。この一兩日午睡癖つきたるものごとし。子規の小品おもしろし。今日の北日本新聞に左の如き記事出たり。こちらへ疎開など出鱈目なるべし。

〔北日本新聞記事「八尾町を訪れて」記事貼附〕×

午食、味噌すゐとんと雑炊、四椀。午后、宇野の「山恋ひ」を讀む。北日本新聞応募歌本月第六回目の予選。二時過高岡晩部隊の船舶兵伍長藤田脩一來る。元讀賣記者。タイ時代のフリーメーソンの話など聴く。短冊二枚を與ふ。鏡湯にゆく。雨降り出づ。猶梅雨模様。晩食、鰯醬油漬、魚野菜うま煮、等。夜、小谷氏葡萄酒一瓶を齎らし来る。川崎氏来ると予告ありて遂に來らず。十時頃就寤。蚤多くして眠り屢覚む。

〔右欄外〕×西の五月十四、十余年ぶりに八尾に来て相聞居のおきなを訪へば風ひきて熱ありといふ「別れ来し京や思はめ古寺の春寂莫と友は寐て居り」

〔三十日〕七時起。雨霽れたれど陰湿。午ごろより再び霖雨。千葉の父容体おもしろからず、孝子に一目會はせたく旨母より申し来る。新聞を見るに、昨晚敵機B 29七十機岡山來

襲、佐世保、門司、下関にも焼夷弾投下を試みたる由。午前、笹津の鶴田氏へ電話。孝子上京につき相談せむとしたるに、恰もよし、今日午后予を訪はむとするところなりといふ。後刻を約して電話を切る。眠り足らず、昨夜危く傷つけむとした眼のあたりも心にかかりて快からず。午食、味噌雑炊。午后、村島夫人来訪。両三日中に上京の由。花子よりの手紙に依れば、静岡の竹迫家も焼失、羽鳥の石上氏方へ避難し居ること也。孝子の上京いかにあるべきと惑ふ。子規の小品を読む。晩食、玉葱玉子バタ焼、葡萄酒小酌。夜、鶴田氏村山氏同伴にて来訪。孝子の上京に同行を快諾。明日更に来訪の上時日を定めんとのこと。持参のウキスキーを酌む。九時過川枝氏酒一升持参にて来る。小谷氏の部屋にて鼎座して痛飲。十二時近く散ず。陶然として就寝。西尾町長より山の芋を貰ふ。

*1 玉生氏……玉旭酒造当主・玉生寛治。戦後、自由民主党の衆議院議員を四期務めた玉生孝久の叔父。

*2 玉堂氏……日本画家・川合玉堂（一八七三〜一九五七）。「とりあへず」の句は、玉堂『奥多摩雑稿』（昭和21・11、草木屋出版部）の「御嶽雑稿」巻頭の句として所収。玉堂の句に応えて、勇は次の歌を詠んでいる。「玉堂が多摩風流の句だよりのなかの山百合見るよしもがな」（『流離抄』『奥多摩文』昭和二十年六月二十日付の勇宛川合玉堂書簡（歴史館所蔵））には、「仰にまかせ拙作細もの二枚御送申上候」とあり、勇からの依頼に応えたものであったことがわかる。

*3 千葉の父……孝子の父・国松喜三郎。

*4 「八尾町を訪れて」……昭和二十年六月二十九日の「北日本新聞」には、次のような記事が出ている。（日記の欄外に引用されている歌は、記事では四句目が「春寂みしみ」となっている）。

八尾町を訪れて

小杉放庵畫伯

『主（ぬし）さ來るか窓の戸あけて見れば立山月ばかり……』未醒小杉放庵畫伯作るところの『おわら節』である、放庵畫伯は十數年前、八尾町川崎順二氏方『壺中庵』に滞杖し『八尾の四季』『八尾八景』その他多くの『おわら節』新作歌詞をものし、今ではそれが誰れの名作か知らねど、郷土の人々に旺んに唄ひ囃されてゐる。

その小杉放庵畫伯はこのほど再び八尾町の壺中庵川崎氏を訪れたことだが、久闊を叙し終るや『壺中庵一向齡とらず』と爆笑し、その萬年童顔の若々しいところを慶び、さらに同町の某寺院に住む相聞居吉井勇氏と會見したが、偶々吉井氏は風邪横臥中なれば『別れ來し京や思はめ古寺の春寂みしみと友は寐て居り』の一首を詠じ、漂然同町を辞去した。

實は放庵畫伯もまた八尾町を慕ふて近く疎開の意向とある。

*5 静岡の竹迫家も焼失……昭和二十年六月十九日夜半から二十日未明にかけての静岡大空襲によつて、住友金属工業の竹迫常栄に嫁いでいた勇の末妹桂子は罹災。静岡「迷悟庵」時代（昭和十二年春）に勇も一時身を寄せた静岡市郊外羽鳥の石上家の離れに避難している。

【戦争末期の日々・千葉の義父の死】

五月末に常松寺から小谷契月居に移った後、小谷家の厚意もあって、勇夫妻の生活は徐々に落ちつきを取り戻す。しかし、戦局はますます悪化してゆく一方であった。そんな中、六月二十七日に千葉にいる孝子の父、義父国松喜三郎危篤の報がもたらされる。「北陸日記」につづく「續北陸日記」は、沖繩本島陥落と義父の重篤という重苦しい記述から始まる（「續北陸日記」は六月二十三日の「ツヅキ」から書き起こされているが、本稿では同月二十五日より抄録）。

同三十日の義母からの急報に、孝子の上京について思案する勇夫妻だが、追って七月一日、「父死す」という訃報が届く。八月一日の日記には、「父の死去せるは六月廿九日の由」と記されている（享年六十三）。

昭和二十年七月

一日 夜半警戒警報出づ。間もなく解除。七時過起。今日も霖雨。午前、十時頃千葉より「父死す」といへる電報来る。

孝子悲歎。上京取止むことにす。小谷家の佛壇を借り、寫眞に焼香死後の冥福を祈る。千葉に打電。川枝氏来訪。午食を共にす。午后、梅雨模様にて陰鬱を極む。臥讀。鶴田氏より電話ありたれば孝子上京見合せの旨を通ず。明日来尾の由。「北日本新聞」の歌の選六月分の第六回目（十七

首）を了す。秋江の「別れた妻」を讀む。同君の癡態を想起して微笑せしむ。夕刻、善唱寺の松岡師を招きて千葉の父のために讀経して供養。夜、川崎、川枝、小谷氏等と共に、すいとろ、河豚干もの、鯖塩焼、かます玉葱うま煮等を肴に一酌。酒一升と葡萄酒三合ほど。十時頃晩食、きやべつ油煮。間もなく就寢。吉例の神社詣、喪中なれば止む。

〔右欄外〕×行年六十三。

××川枝氏にその不幸を慰むる為短冊一葉を贈る。

二日 零時半頃空襲警報出づ。敵機七尾、伏木、富山湾等に機雷を投下せるもの如し。爆音を聴くこと数度。二時頃解除となりて再寐。八時近く起。今日も霖雨。午前、谷崎君より来状。永井荷風氏も岡山へ疎開の由。手紙を書きたる后探偵小説などを讀みつつうらうつらと午睡少時。午食を止めいり豆などを食す。午后、雨漸く止む。郵便局にゆき玉生、川崎両氏を訪ひたるもともに不在。秋路君のところに寄り少時店先にて閑談の後飯る。夕刻又雨降り出づ。晩食、馬鈴薯葱うま煮、きやべつ味噌汁。夜、野口米次郎の「芭蕉論」を讀む。八時就寢。よく眠る。

七日 六時起。今日も雨。天の底の抜けたるが如し。揮毫、西尾氏へ贈る短冊一枚。廣瀬君子の詠草に加筆。午前、朝食今日も十時。手紙を書く。五百木氏よりふた名煮二個到着。一葉の「われから」「ゆく雲」等を讀む。新聞を見るに、敵ボルネオに一万五千を揚陸せる由。猶P 51九十九機六日晝茨城、千葉、埼玉を襲へりといふ。更にまた放送に依

れば七日早晩敵B29二百機甲府、清水、千葉の三市を盲爆せりと。千葉の家やかゞあらん。孝子の上京せざりしは天佑といふ可し。今日は寒く襦袢を欲す。午后、歌をつくる。「学海」のために「放庵の石の凶に題す」十首。三時頃鏡湯にゆく。蕪を得て飯る。晩食、きやべつ玉葱バター焼、ふた名煮。酒一陶。夜、閑談の後八時半就蓐。夢。

八日 日も雨瀟々たり。八時起。朝食は昨夜の冷粥。為政者及び軍部の厚顔無恥を憎むの情勃然と起る。主食の配給一割減のため民間とみに怒色ありと。午前、「学海」の原稿を墨書して八束君に送る。一葉の「やみ夜」「大つごもり」等を読む。今日も寒く晩秋の感あり。午食、味噌雑炊。午后、川崎氏を訪ひ壺中庵にて閑談。ふかし馬鈴薯を馳走になる。秋路氏を訪ひ本を借りて飯る。孝子山にゆきて七時頃飯宅。新聞を見るに千葉に来襲の敵機五十機なりといへば、全市殆んど灰燼ならん、心配に堪へず。昭和七年の「中央公論」を読み得るところ多し。皇国を危局に陥れたる原因は、軍部の政治的進出にあり。換言すれば兵権と政權とを明確に区分せざりしところに禍因存す。白晝軍人等兵器を弄して老首相を殺し、然も自ら咎むるところなし。知るべし、皇国今日の運命は、彼等自ら招来せるものなることを。十数年前の雑誌を読み深慨に堪へざるものあり。晩食、生玉子一個、塩鮓。酒一陶。夜、小谷氏の購ひ来れる金具などを見る。九時半頃就蓐。

〔右欄外〕×收穫米、小豆、玉子等。

九日 七時半起。漸く雨霽れむとす。午前、手紙を書く。創元社より来状。「短歌風土記」は再び罹災。されど三度印

刷にかかりあくまでも上梓する由。矢部氏曰く。「恰も賽の磧にて石を積むが如し」と。篠原京都市長より歌の選の依頼あり。諾。郵便局にゆく。玉生、谷井両氏に會ふ。午食、雑炊一碗蒸し馬鈴薯。午后、臥讀をつづく。「北日本新聞」の本月第二回目の予選。芦花の「黒潮」を読む。晩食、葱若布ぬた、塩鮓。酒一陶と葡萄酒少々。夜、八時過床に入りたるころ九時頃川崎氏来訪。起きて會談の後に十時再寐。うとうと夢を見たりと思ふ間もなく十一時頃警戒警報出で、つづいて空襲警報。蹶起して服装を整へ待機。情報に依れば四日市、岐阜攻撃中、富山湾上旋回中とのこと。空を過ぐる敵機の爆音を聴くこと数回。十数機も過ぎたるべし。三時頃三たび就蓐。浅き眠に落つ。

十日 八時起。晴。梅雨晴れたるもの歎。午前、九時頃警戒警報出づ。空遠くB29一機の過ぐるを見る。間もなく解除。小谷氏に玉堂の「夏の月」の幅を贈る。一洋の「涼風」玉堂の「百合」の二幅の表装を富士原に頼む。芦花の「黒潮」を読む。午食、味噌豆にて飯二碗。午后、高熊鉦泉にゆく。飯途秋路氏に會ひ伴ひて飯る。閑談少時。中央公論のロシア小説「カルタの負債」を読む。睡眠不足と湯上り^{ユヅリ}の疲労のためうとうとと眠る。「黒潮」を讀了。東老人の心事に同感す。晩食。塩鮓、味噌豆等。酒一陶。夜、柳宗悦の「私の念願」を読む。八時過就蓐。今夜は半分防空服装にて寐ねたり。よく眠る。

十一日 六時半起。曇りて又梅雨模様となる。新聞に依れば十日夜B29二百七十機は岐阜、四日市、和歌山、堺、高知などを焼爆、更に又同日朝には艦上機約八百は関東地方に、

B51百機は阪神附近に来襲せる由。戦争の様相漸く深刻を極めつつあり。おそらくこの二三ヶ月中に大変化あらん。矢倉君より来状。歌集「寒行」許可になりたる由。近來は殆んど全部不許可なりと。午前、「北日本」の歌の選を了す。(本月份第二回百十五首)不図思ひ立ちて揮毫。中山氏の画帖、正岡の額その他。午食、粥三椀。午后、大分暑し。川尻氏の手紙に依れば大谷松竹社長は爆風の為聾者となり社長を辞任したる由。終りに句あり。録二句。「見わたしの果の愛宕の青葉哉」「縁日で會ひし髪結の袷哉」。猶内山冬柏翁は去月廿三日逝去せりと。行年七十八歳。午睡少時。一葉の「うもれ木」「雪の日」を讀む。夕刻より雨降り出づ。富山より北日本新聞の藤井氏来る。小谷君の義弟也。晩食を共にす。山芋、きやべつ玉子バター焼、菜胡麻あへ、鯪、その他にて一酌。夜、九時頃川崎氏養子の清氏を伴ひて来訪。清氏は海軍の軍医。十時頃就蓐。猛雨徹宵止まず。

〔右欄外〕×十日夜富山湾へ来れるはB29十機。機雷投下。

〔十二日〕雨漸く霽れたれど猶曇天時々雨。七時起。手紙を書く。午前、雑誌を讀む。午睡少時。午食、きやら露。午后、一葉の「花ごもり」「うつせみ」「十三夜」「わかれ道」等を讀む。雨降りつづきてもうし。露伴の「武田信玄」に些か鬱を散ず。更に又一葉の「たけくらべ」を讀み、今更ながらその名作なるを感ず。晩食、湯豆腐、豆腐葱味噌汁。夜、久しぶりにヴェキタルゲンの注射。柳宗悦の書物のことを書きたるものに心惹かる。雨烈し。小谷氏と一時會談の後九時頃就蓐。十一時過空襲警報出づ。起きて待機。

〔十三日〕警報四時に至りて漸く解除。今夜は一の宮、前橋等を盲爆せるが如し。再寐の後九時起。雨止みたれど曇。朝食十時頃。午前、露伴の「武田信玄」を讀む。大豆雑食のためにや腹工合悪し。「高志消息」の歌を作らむとして成らず。午食、冷粥、冷味噌汁。午后、川崎氏を訪ひ玉生君に會す。名古屋、岐阜等の戦兵の状況を聴く。高山線にて空襲警報に四回會へりといふ。組合及び秋路居に寄りたる后三時頃飯宅。夕刻、川崎氏来訪。小谷氏と三人玉生氏の招きに応じて北よしにゆく。所謂公婦なるもの五人、久しぶりにおわら節を聴く。飯途川崎、玉生両氏と別れ小谷氏と二人和泉やにゆく。この夜の料理、北よしは鶏ロース、全さしみ、オムレツ、揚空豆等。和泉やは、鮎塩焼(二尾)鱒さしみ、全葱清汁、山芋うま煮、鱒胡麻酢のもの等。前者は酒一升、后者は酒二合、葡萄酒二合。快酔十時頃飯宅し、焼豆腐と若布味噌汁にて飯二椀。星明り美しき良夜なりき。十一時就蓐。熟睡。警報も出でず。

〔十四日〕七時起。晴ると見えしも又曇。新聞に依れば十三日晩敵機は一宮、大垣、敦賀、宇都宮、鶴見、郡山の各市を焼爆せる由。敵のなすがまになりある有様、思ふだに齒痒ゆし。午前、歌をつくる。小杉放菴十首。川合玉堂氏より来状。燕の繪に長歌あり。曰く、

くぬちみないくさの場と、小荷物も小包便も、あつかはず物し送らむ、手だてなく物しとどかむ、望み絶えせんすべ知らに、今はただ解禁の日を、待ちわぶる。山女は四月、鮎釣は六月はじめ、解禁の日のあるものを、小荷物や小包便に、解禁の日は無きものか、月はなきものか。

玉堂翁の風貌現はれておもしろし。露伴の「今川義元」を讀む。午食、米、大豆、小豆、味噌、鯉節、鯉の汁より成る不思議なる雑炊三椀。午后、歌をつくる。「高志消息」の金窪安三数首。二時頃高熊鉦泉にゆく。三時頃東本願寺富山別院の金剛行證氏來訪。講演の依頼ありしも断る。孝子菓子をつくる。黄な粉にサツカリン少量を加へ茶巾絞りとしたるもの。意外の成功にて往時の菓子を偲ばしたるものあり。「おもかげ」と名づく。小豆粥の晩食を六時頃終り散歩に出づ。禅寺下の釣橋にて川崎氏に會ひ、更に途上玉生氏に會す。飯宅后ラヂオなど聴き、雑談の後九時頃就蓐。

十五日 今日はやも雨。七時過起。天候のためにや體懶し。新聞を見るに、十四日早曉敵機函館、室蘭、帯廣、釧路等に來襲、猶奥州釜石の海岸には敵艦現はれ艦砲射撃を行ひたる由。戦争の様相いよいよ深刻。午前、北日本の歌の予選。ヴェキタルゲン一筒注射。露伴の「幽情記」を讀む。午睡少時。午食、小谷氏より貰ひたる雑炊と鯉節にて飯二椀。午后、雨いよいよ烈し。おやつに今川焼四個。菊山君の「芭蕉」を讀む。歌をつくる。「高志消息」中の川合玉堂数首。晩食、味噌と鯉節にて白粥。貧厨いよいよ貧。夜、「私の念願」を讀み、民藝家の信念を知る。九時頃就蓐。雨中警報出づ。一機金澤、富山方面偵察。

十六日 一時過警報解除。蚤と蚊のために眠浅し。七時起。雨止みたれど曇天。午前、「幽情記」を讀む。^{*}谷崎君より來信。荷風氏岡山にて又々罹災されたるが如しと。孝子新潟下田氏より來れる荷物を受取りに停車場へゆく。飯り來

れるを見れば鯛なりき。午食、粥三椀、きな粉。午后、北日本新聞の歌の選（本月第三回十五首）を了す。手紙を書く。「幽情記」と「芭蕉」を讀む。再び雨降り出でて陰湿を極む。晩食、粥、胡瓜味噌。食ひものだんだん情なし。夜、小谷氏と閑談。九時頃就蓐。警報なくよく眠る。

十九日 雨霽れたれど猶雨気あり。七時半起。新聞を見るに十七日朝敵機動部隊水戸日立を砲撃、艦上機も横須賀はじめ、茨城、千葉、群馬、埼玉、栃木、神奈川の諸縣に來襲、猶全夜B29十機は富山湾に機雷投下、福井縣にも十九機侵入したる由。戦局一層苛烈となれり。午前、手紙を書く。祇園大友の女将お多佳さん死去せる由。西岡水朗より謝禮（一〇〇）来る。午食、ぬたにて粥二椀。午后、郵便局にゆき矢倉、井ノ本両氏へ八尾の封筒を送る。西尾、岩城両氏に答禮の挨拶にゆき短冊一葉づつ贈呈。川崎氏に寄り閑談。玉生氏酒を携へて來り二杯ほど飲む。馬鈴薯のマツシユを御馳走になる。途上廣田壺中居に會す。秋路居に寄り本を借りて飯る。夕刻より再び雨降り出づ。晩食、きやべつ味噌汁、きやべつ馬鈴薯油いため、馬鈴薯葱入バタ焙り飯。酒一陶。夜、防空設備を検し雑談の後九時頃就蓐。十一時前警戒警報出づ。敵機福井市を焼燬。
〔右欄外〕×夕刻平野源藏氏より花を届け来る。明朝來訪の由。

二十日 第二陣は東海道岡崎市を襲ひ、三時頃漸く解除。七時半起。梅雨漸く霽れたるが如し。今日は土用の入。やや気温も上れるやうに覚ゆ。八時警戒警報。空遠く敵機を見

る。やがて爆弾の音。速星、西富山あたりならむ歟。煙上るを見たりといふ。新聞を見るに、十八日房總の漁村に艦砲射撃を加へたる由。猶京都、大阪方面にては新たに目標を交通機関に変へたるもの如し。午前、十時頃平野源蔵氏来訪。茶をもらふ。河村幸次郎君廿六日頃来尾の由。雑談時余。午食、いり飯、味噌汁等。午后、送り来れる自著の整理。大分暑し。露伴の「太公望」を讀む。川枝氏酒を携へ来るとのことゆゑ晩食を遅らす。八時過川枝氏、小谷氏、やや遅れて玉生氏の四人鮭、菊菜、二名煮等にて一酌、遂に二升を盡くして止む。終りて野菜揚にも晩食。十一時過陶然として就寢。痴夢半にして覚む。富山より藤井氏の一家来る。

- * 1 秋江の「別れた妻」……近松秋江の小説「別れたる妻に送る手紙」。勇の『祇園歌集』に秋江を詠んだ次の歌がある。「秋江が閨ねやのうらみを書く時を秋と云ふらむ京の仇あだし寢ね」
- * 2 谷崎君より来状……昭和二十年六月二十八日付谷崎潤一郎書簡（歴史館所蔵）。
- * 3 昭和七年の「中央公論」……「中央公論」昭和七年七月号には、同年の「五・一五事件」で青年将校に殺された犬養毅首相の追悼記事「犬養木堂を憶ふ」がある。また同年九月号には満州国承認問題が採り上げられている。
- * 4 谷井……谷井秀峰（三郎、一九〇八〜一九六六）。日本画家、紙漉き職人として棟方志功らと親交もあった。「甚六会」の一人。
- * 5 「カルタの負債」……「中央公論」昭和七年七月号掲載のイワノフの小説（米川正夫訳）。

- * 6 川尻氏……演劇評論家・川尻清潭（一八七〇〜一九四〇）。
- * 7 内山冬柏……内山英保（一八六〇〜一九四五）実業家・歌人。与謝野寛・晶子とも交流があり、文化人の集う鎌倉の邸宅は寛により「冬柏山房」と名づけられた。勇の主宰誌「スバル」（第二次）の発行を援助。六月二十三日没。
- * 8 藤井氏……小谷契月の義弟・藤井健次。当時北日本新聞社の総務局長であったが、八月一日の富山大空襲により死亡。

- * 9 くぬちみな……奥多摩疎開時代の玉堂の長歌。前掲書『奥多摩雑稿』所収。「君が賜たまびし長歌を讀めば奥多摩の瀬々のせせらぎ聴こゆるが如」（吉井勇『流離抄』「奥多摩文」）
- * 10 谷崎君より来信……昭和二十年七月三日付谷崎潤一郎書簡（歴史館所蔵）。
- * 11 祇園大友の女将お多佳さん……磯田多佳（一八七〇〜一九四五）京都祇園の大友の女将。夏目漱石ら文人たちと親交があり、勇は大友に宿泊した折りに代表歌「かにかくに」の想を得たとされる。「大友のお多佳は亡なせぬ友のため茶音頭の三味弾しやみくひともなし」（『流離抄』）五月十五日没。
- * 12 廣田壺中居……東京日本橋の古美術店「壺中居」の創業者・廣田松繁（不孤斎、一八七〇〜一九七三）。廣田は八尾町出身。

【知人たちの疎開と訃報】

五月中旬に熱海西山から岡山県津山市に疎開した谷崎潤一郎は、七月より同県勝山町小野はる方へ移っている。東京大空襲で偏奇館を焼け出された永井荷風はその後各地を転々とし、六月十一日に岡山市内に疎開。同月二十九日未

明の岡山上空襲で再び罹災する。七月二日の日記にある谷崎書簡は、勝山町への移転（再疎開）と荷風の岡山疎開を知らせる内容、また同月十六日の来信は、荷風が岡山上空襲の後音信不通であり罹災したのではないかと知らせるものである。二日、十六日の書簡に対して、勇は谷崎宛に次のような返信をそれぞれ書き送っている（個人蔵、二通とも未発表書簡）。

①昭和二十年七月二日付 谷崎潤一郎宛はがき

御葉書拜見。荷風先生にお會ひの節は何卒よろしく御傳へを願上候。創元社の歌集も再び灰燼ではないかとおもひ居り候へ共判然と不致いろいろ心もとなき事のみに御座候。日々の梅雨空、籠居にもほとほと倦きはて申し候。

二日朝

②昭和二十年七月十七日付 谷崎潤一郎宛はがき

御手紙拜見。こちら俄然食糧難、この二三日は味噌にて粥を啜り居り候。しかし又俄然豊富となることもあり、一起一伏明日のこと測りがたく候。荷風先生のこと心許なく、たしかなりしとお分り次第お知らせを願上候。こちら少し雲行怪しく夜ごとの夢も安からず候。

十七日朝

②の書簡は、「晩食、味噌と鯉節にて白粥。貧厨いよいよ貧。」（十五日）、「晩食、粥、胡瓜味噌。食ひものだんだん情なし。」（十六日）という日記の記述と符合している。小谷氏の許には二十日に義弟藤井氏の一家が疎開。小谷家は大所帯を抱えることになり、朝午食は雑炊、きな粉、馬鈴薯などで凌ぐ日々が続く。

こうした中、内山冬柏、磯田多佳ら古くからの知人の計報が相次いで届き、戦争末期の様相が濃くなってゆく。

廿五日 八時近く起。近来になき快晴。朝飯、馬鈴薯。川尻氏より来信。中に時事川柳あり。「負ける都度サア戦争はこれからだ」「配給はおあまり程にあてがはれ」「東京の廣さを知った焼野原」等。午前、手紙を書く。川枝君来る。

今日飯神の由。午食、馬鈴薯、きな粉。情なき限りなり。午后、「八大傳」の脚本讀了。秋路居を訪ひて閑談。するめ少々贈る。新聞を見るに昨日来襲の敵機は約二千機、四百機のB29大阪方面を攻撃せる由なれば「風土記」もあはれ三度目の罹災か。晩食、今日配給の烏賊と玉子うま煮、塩鮭、湯豆腐等。夜、秋路君来る。ともに高熊の観音の森にゆき、石に踞してその笛を聴く。山の囃しの一の手二の手。その曲や寂しく螢も瘦せたり。雨降り出でたれば川崎氏に寄り傘を借りて飯る。留守に平野源蔵氏来れる由。九時過就寢。十一時過警戒警報、つづいて空襲警報出づ。敵十数機富山湾に機雷投下に来れるもの如し。

廿六日 二時過警戒解除。この間敵機の爆音を聴くこと数度。八時起。曇。朝食、ポテトフライ、飯一碗。午前、川枝君来る。昨夜汽車に乗遅れたる由。十一時警戒警報出づ。間もなく解除。南北の「勝相撲浮名花觸」「盟三五大切」を讀む。北日本新聞の歌の選を了す（本月第四回十三首）、午食、馬鈴薯、きな粉、雑炊等。午后、川田君より来信。歌あり。「隣国加賀のみ湯にもゆきかねて妹とこもるか飛驒の境に」「八尾女が井田川のべに漉く紙は吉井の大人の

歌を書かむため」又久保田、花柳、寺田三君の寄せ書来る。中に傘雨の句あり。「二」この壺に秘めたる秋の思ひかな」
 「借りて着る浴衣のなまじ似合ひけり」川枝君は今日又出發出来ざる由。南北の「當糶八幡祭」を読む。夕刻天やや晴る。晚食、椎茸、玉葱入玉子丼。久しぶりにて城ヶ山散歩。川崎氏に寄りて飯る。八時頃富山より藤井氏魚持参にて来り、小谷氏と三人一酌。かに二杯酔、ぼら塩焼、かに味噌汁、胡瓜もみ等。酒とどぶろく。十時過寐。警戒警報出でたるもよくも覚えず。藤井氏の話に依れば、この二週間内に戦局大變動あらんとのこと。
 「左欄外」××この日川田大人より来状。中に歌あり。「隣国加賀のみ湯にもゆきかねて妹とこもるか飛驒の境に」「八尾女が井田川のべに漉く紙は吉井の大人の歌を書かむため」「岩根ふみ攀ち来る君を立山の雄山の神は片待つらしも」
廿七日 曉夢を見て精を失す。不調法の至り也。八時起。晴れて暑熱加はる。午前、南北の「八幡祭」を読む。午睡少時。岡山小橋氏より玉葱を送りたる旨来信。午食、きな粉一椀。午后、南北の脚本を読みつづく。夕刻より小谷氏孝子の三人、富山繊維統制會社の招待にて杉下にゆく。下の関の河村氏来るとのことなりしも不參。大間知社長、村井、大間知、島村、松原、内山、及び平野氏と同席にて晚餐を共にす。料理は高島、和泉や等四軒より取り寄せたる由にて佳肴多し。鮎塩焼、全天ぶら、こち刺身、全あら煮、口取、牛肉野菜煮、焼鳥、鳥野菜椀、吸とろ、その他。一酌歡談。富山の連中は八時頃飯る。九時頃警戒警報出でたるに依り驚きて飯る。この夜警戒警報出づること三度、十一

時過遂に空襲警報となる。

「右欄外」×平野氏持参の牡丹餅二個。

廿八日 二時頃漸く警報解除となりて再寐。八時起。半晴半曇。子供等うるさし。午前、九時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。午睡少時。南北の「浮世柄比翼稲妻」を読む。川枝君来る。いよいよ今日出發とのことなり。懶うければ何もなさず。午食、米團子入り汁、馬鈴薯。(但し團子溶けてポタージユの如し) 午后、臥讀時に午睡。浪六の「たそや行燈」を読む。やはり一種の才筆也。夕刻より蒸し暑く曇り来る。終日籠居。新聞を見るに、米英蔣の対日共同宣言あり。B 29は廿六日夜、松山、徳山、大牟田を焼燬。晚食、塩鮭。夜、九時頃就寝。十一時頃警報出づ。

廿九日 警報と蚤のため三時頃まで眠れず。八時起。晴。新聞を見るに、敵機動部隊再び四国洋上に出現、東海、近畿、中国、四国へ艦載機襲来。別にB 51二百四十機関東へ来襲。様相いよいよ緊迫。朝食、きな粉二椀。午前、成瀬無極君より来状。笹津近くに疎開の由。仙台藤村氏への手紙戦災不明にて戻り来る。眠り足らず不快。十時過警戒警報出でたるも間もなく解除。午食、馬鈴薯餅。(新聞に出でたる料理なれどまづし。新聞記事の信じがたきこと概ねかくの如し) 午后、南北の「心謎解色糸」を読む。南北の才筆は学ぶべきところ多し。句楽物を書き直さむかなと思ふ。晚食、干鰯、豆味噌煮。食后散歩に出で川崎氏を訪ふ。菓を買ひて飯る。玉生氏より北よしへ誘ひの電話かかりたれど遅ければ断る。この夜警戒警報出でず熟睡。

三十日 八時起。半晴半曇。暑甚し。午前、八雲書店飯田莫

哀より来状。決戦歌集といへる叢書を出す由。六十四頁の本にて旧作自選。諾して直ちに編輯にかかる。題を「星雲」とす。新聞を見るに、廿八日B 29三百余機来襲、宇和島、大垣、一ノ宮、津、宇治山田、焼津、下津、青森、平等を焼爆せる由。午食、馬鈴薯。千葉父の命日につききな粉の茶巾絞りをつくりて供ふ。午后、専念歌集の編輯に没頭。夕刻遂に一冊の編輯を大体了す。内容より見て「神杉」と改題。晩食、玉子、するめ入り馬鈴薯、玉葱の野菜汁。夜、冷水にて全身を拭く。孝子は前の流にゆきて水浴せる由。何といつても田舎町は呑気なところあり。小谷氏と會談の後十時近く就寝。眠りがたく夢を見る。この夜も警報出でず。

〔右欄外〕×一時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。

卅一日 七時過起。快晴。歌集のルビ振り了す。朝食、野菜汁二椀、馬鈴薯、きな粉。午前、新聞を見るに、廿九日夜敵機動部隊は巡洋艦等にて濱松及び潮岬に艦砲射撃を加へ来れる由。猶卅日朝より東海へ七百機、中部（近畿）へ三百五十機、東部（甲駿）へ八百八十機の艦載機来襲。漸く交通網を目標とし来れるもの如し。通信、交通の杜絶も近からんか。久しぶりに千葉の母及び松之助君より来信。平野源藏氏を訪ひ、先日ので挨拶を述べ短冊一葉を贈る。抹茶一椀。坂途玉生氏と秋路氏を訪ふ。暑甚し。午食、きな粉二椀。午后、小谷氏より君が代国旗を貰ふ。南北の「お染久松色讀販」を讀む。四時頃郵便局にゆき「神杉」の原稿発送の後鏡湯に入りて飯る。晩食、塩鮭、胡瓜酢もみ、飯四椀。静かなる黄昏にして空の色美し。今日より開襟シ

ヤツ半ツボンを着る。夜、八時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。九時就寝。十一時頃警報再び出でたるもよくは覚えず。七月は終れり。梅雨空は晴れたり。さあれ戦雲いまだ霽れず。空襲艦砲射撃相つぎて刻々皇土は焦土と化す。天王山は遂に移動して本土に在り。これより又一月間の変化はいかゞあるべき。思ふてここに至れば、外夷敵に對してはもとよりのこと、内庸臣等に対しても、震怒の情禁ずる能はず。若し最後に責を国民に転稼することあらば、老軀蹶起して敢て起たむ。

* 1 山の囃し……五月の節句に合わせて行われる八尾八幡神社の春季祭礼「曳山祭」の囃子。曳山の囃子には、三味線

・横笛・太鼓が用いられる。林秋路は横笛の名手であった。
* 2 藤井氏の話に依れば……七月二十六日、B 29は富山市内に大規模な空襲を警告する伝單「日本国民に告ぐ」を撒布。

藤井氏の話はこの伝單の情報によるものか。

* 3 川田大人より来状……昭和二十年七月二十三日付川田順書簡（歴史館所蔵）。「寄吉井勇大人」五首を同封。他二首は、「山の草摘みて食ふとふくらしにも今日このごろは井田川の鮎を」「家持の後と吾が思ふうたびとを越のくにびとおろそかにすな」

* 4 句楽物……落語家・三代目蝶花楼馬楽をモデルとした勇の一連の作品「俳諧亭句楽の死」「句楽の日記」など。

* 5 決戦歌集……戦争末期に八雲書店が企画し未刊に終わった歌集叢書。齋藤茂吉の歌集『萬軍』^{ばんぐん}が知られる。

* 6 「神杉」……幻となつた勇の決戦歌集。詳細未詳。

【秋路の笛】

紙漉き職人であり、「おわら絵」の第一人者として知られた林秋路（本名正雄、一九〇三〜七三）は、勇の酒間の友であり、八尾疎開時代の最も気のおけない友人であった。秋路はまた、横笛の名手でもあった。勇は『私の履歴書』に、秋路との思い出を次のように印象深く記している。

「この秋路というのは、私が常松寺からさらに移った小谷氏の家に近いところで、紙漉場を営んでいた男であつて、絵を描いたり俳句を作ったりする趣味人だったが、この郷土民謡であるおわら節もうまく、ことに笛が上手だった。酒好きの人物だったから、私も親しくつき合っていたが、ある夜などはこの町のすぐ下を流れている伊田川の川岸にある、ある神社の森の中で、石に腰をかけたがら夜がふけるまで、その笛を聴いたことがある。」

勇はこの「ある夜」の出来事をもとに『流離抄』の「秋路の笛」八首を詠んでいる。

この町のとりわけひとり善人の秋路笛吹く月夜あかりに
 一管の笛を手にして秋路言ふ月夜あかりに吹けば樂しと
 手に取れば秋路の心通ふらむ笛おのづから鳴るにあらざ
 や
 いにしへの物語めくいろとおもひ秋路の持てる笛の朱を
 見る
 ひやりひよう秋路が息を吹くなべに一管の笛鳴り出でに
 けり
 いっしんに吹ける秋路の笛聴けば動くがごとき月あかり
 かも

夜をさむく石に腰懸け聴くときは秋路の笛の音もかなし
 も
 かくばかり澄める秋路の笛の音は山の精も聴きぬべきか
 な

日記の記述から、この「秋路の笛」を実際に聴いたのが、戦争末期の七月二十五日の晩であること、またその場所が井田川のほとりにある「高熊の観音の森」であることが明らかになった。高熊観音の参道脇には、大人が腰掛けられそうな一抱えもある石がいくつか据えられている。ちょうど二十五日は、月齢十五・六の良夜であった。勇と秋路は月明かりに誘われて高熊観音を訪れ、亡国の悲愁を胸に笛の音に耳を澄ませていたのであろう。秋路愛用の朱塗りの笛は、今も二女・林淑子氏の許に遺されている。

「この町のとりわけひとり善人の」と詠われているように、人間関係で苦悩することの多かった八尾の疎開時代の中で、秋路との交流は勇にとつて特別なものとなっている。それは、秋路が名利にこだわらない飾らない人柄であったこと、そして自分の信じた芸の道に生きる人であったことに由来するように思われる。そしてまた、秋路との間に生活（食住）上の直接の利害関係がなかったことも大きいであらう。

八尾との関わりでいえば、勇夫妻をこの地に迎え入れた川崎順二の功はいまでもなく、自家を提供して献身的に奉仕した小谷契月の存在が第一に挙げられるべきである。しかし、時代の状況はかつて小杉放庵が八尾に滞在した時とは違っていた。日毎乏しくなる物資や食糧、そして連夜

の空襲警報に追い詰められ、誰もが生きること必死で、心情的にも余裕を失なっていた。これは勇にとっても、八尾の人々にとってもたいへん不幸なことであった。

重苦しい時代の中で、勇は八尾の人々が本来持っていた醇朴なものを、「紙漉きの秋路」という存在に託して表現しようとしたように見える。秋路の描く紙漉風景十五図をもとに詠んだ「紙漉風景」六十二首の連作は、歌集『流離抄』の頂点をなす秀吟であり、勇の「越びと讃歌」なのである。

越路なる八尾をみなは人知れぬなさけを持ちて紙を漉くらし
越びとはたつき楽しみ漉き上げし紙を乾すなり冬の日和
(第十一図)
(第十三図)

昭和二十年八月

一日 八時起。昨夜久しぶりに熟睡、心気爽快也。快晴にして天空一碧。朝飯、塩鮭、胡瓜、飯四椀。午前、千葉の母より来信。父の死去せるは六月廿九日の由。新聞を見るに、卅日夜敵は清水港を艦砲射撃、猶艦上機二百数十は舞鶴へ来襲せる由。手紙を書くこと十数通。一日なれば若宮八幡に詣づ。伯方島大澤翁より干魚来る。章魚の干ものめづらし。午食、きな粉二椀。午后、文藝春秋所載高見順の「馬上侯」と清水基吉の「雁立」を讀む。ともにおもしろし。

やはり純粹の文学なるかな。手紙を書く。暑甚し。晩食、冷奴、豆腐味噌汁、飯三椀。夜、孝子と共に上水にゆきて半沐浴。心地よし。九時頃より小谷氏、宮島氏と鼎座して鮎、豆腐、菊菜を肴に一酌。十時頃空襲警報出でたるも遮光幕を下ろして飲む。十一時解除となりたれば就寝したるも何となく不安にて眠れず。そのうちラヂオは第二波の侵入を傳へ再び空襲警報出づ。十一時半爆音に蹶起して外に出づれば富山の空灰かに赤し。城ヶ山の山腹より見れば暴爆中の富山は既に半猛火に包まれたり。高射砲の弾音、爆弾の裂音、等交錯して聴こえ、火焰は見る見る全市を蔽ひ、その悲惨なる光景は、さながら地獄変相図を見るが如し。慨然として凝立すること多時。

二日 暴爆の終りたるは三時に近し。小谷氏と残酒をコップにて傾く。四時頃漸く就寝。六時過富山にゆく小谷氏を送りて再び眠る。九時近く起。快晴天に一点の雲なく、昨夜の暴爆は夢ならずやと疑はしむ。小谷氏は速星より汽車ゆかず引返し来る。富山は全市殆んど灰燼の由。朝食、飯一椀、味噌汁三椀、馬鈴薯少々。午前、川田順君に手紙を書く。落語全集を讀む。富山の戦災にて交通途絶、今日は新聞も手紙も来らず。午后、秋路氏を訪ひ和田秀美堂に會ふ。川崎氏を訪ひたる后坂宅。二時頃午食代りにきな粉。臥讀しつつ午睡少時。櫻田治助の脚本を讀む。南北とは格段の違ひ也。小谷氏の義弟藤井氏の消息不明、皆々その生死を案ず。晩食、きやべつ油煮、鮎塩焼等、飯三椀。夜、上水にて沐浴。誤つて手拭を流失。九時頃就寝。熟睡。夜半警報出でたるもよくは覺えず。今日はラヂオもよく聴こえず、

夜に入りて漸く回復。

三日 八時半頃起。小谷氏父子、藤井夫人の富山にゆくを夢寐の間に聴く。今日も快晴にて暑熱灼くが如し。午前、臥讀に時を銷す。手紙を書く。午食、寒天ときな粉。午后、川崎氏を訪ひたる后、郵便局、銀行にゆき、城ヶ山に登りて小憩。富山の方を遠望するに、猶煙の立ち昇れるところ五六個所あり。自然の美しさと人生の醜さを対照して無量の感慨をおぼゆ。官僚軍部の虚偽を憎むの念いよいよ深し。飯れば海老亭の村君在り。纒うじて戦禍を免かれ八尾に避難して来れる由。茶碗勝栗など持参。見舞として百金を贈る。露伴の「幻談」「雪たたき」を讀む。今日も猶新聞も郵便も来らず。ラヂオのニュースも聴かざれば世の中の情勢全然分らず。唯村君の話に依りて藻谷銀河君の戦災死を知りたるのみ。晩食、玉子入雑炊。夕刻小谷氏富山より飯り来る。藤井氏行方分らず。おそらく爆死ならんとのこと。氣の毒といふべし。岡山小橋氏より玉葱を送り来る。夜、佛壇の前に藤井氏の冥福を祈り、予歌をつくる。小谷氏と今後の覚悟を語る。結局本来の無一物にかへる時来れる也。豁然として大悟すべし。十時就蓐。眠り浅し。今日も若宮八幡に詣でて祈願。

〔右欄外〕×録一首〔以下空白〕

四日 七時半起。床中「李白」を讀む。中に「王風萋萋草」の句あり。今日も快晴。空を見れば唯一碧。朝食、飯三碗、味噌汁一碗。午前、四日ぶりに産業新聞来る。(北日本は未刊)それを見るに一日八王子、水戸、立川等を暴爆、猶同日敵は伊豆大島に艦砲射撃を加へたる由。わが軍の無為

焦燥に不堪。露伴の「鷺鳥」を讀む。午睡少時。午食、馬鈴薯入白粥。午后、臥讀。手紙を書く。四時頃鏡湯にゆきたるも休み。川崎氏を訪ひて世間話。富山の負傷者大分来れる由。晩食、馬鈴薯玉葱うま煮、かます干魚等。夜、露伴の「連環記」を讀む。今日も猶郵便来らず。暗くなりたる后上水にゆきて沐浴。小谷氏富山より飯り来りしも藤井氏の情報猶不明。十時頃就蓐。十一時近く警戒警報出でたるも間もなく解除。

五日 八時半起。快晴にして暑熱昨日よりも酷しからむか。小谷氏今日も富山にゆく。朝食、馬鈴薯玉葱のうま煮。午前、露伴の小説集「幻談」讀了。午食遅く二時を過ぐ。馬鈴薯入白粥三碗。午后、北日本新聞三日、四日、の二日分、回覽にて来る。それを見るに一日夜富山爆撃のB29は七十機。同日暴爆せる都市は、長岡、水戸、鶴見、川崎、立川、八王子、宇和島等なりし由。猶同日大鳥島を爆砲撃せりといふ。浪六の「三日月」を讀む。天漸く曇り来る。郵便は猶来らず。通信杜絶すること今日にて四日。不用意といふべし。浪六の「後の三日月」を讀む。夕刻小谷氏飯宅。藤井氏いよいよ絶望の由。明日は誰が身の上かと哀深し。晩食、玉葱馬鈴薯入り飯。夜、八時頃上水にゆきて裸浴。螢飛びて水に落つ。野趣俳趣ありておもしろし。九時過就蓐。十時過警戒警報出でたるも間もなく解除。蚤多くして眠安からず。

六日 七時半起。今日も晴る。朝食、味噌汁にて飯三碗。午前、九時過警戒警報出でたるも敵機猶遠し。當路者も少々神経衰弱の気味か。三世新七の「籠釣瓶」を讀む。午食、

馬鈴薯醬油煮。午后、郵便五日目に来る。但し北日本新聞の投稿一通。小谷氏の話に依れば富山の郵便局は今日より開局せりといふ。緩急不届至極。三時頃より秋路氏、織維組合、川崎氏を訪ひ、玉生氏より酒、秋路氏より封筒を乞ひ受けて返る。聞名寺境内にサアカスの小屋かかり、町の所々に地藏盆の供物あり。山の方へ疎開する荷物の車引きつづきて、戦ひの世の哀れさを見る。応仁の乱など思ひ出でられて寂し。夕刻、上水浴。久しぶりの酒を小谷氏と小酌。晩食、馬鈴薯醬油煮、鯉節等。夜、秋路君来訪。明日本法寺に国宝の曼陀羅見にゆかむと約す。九時過就蓐。夢半にして覚む。警報出でたるもよくは覚えず。

七日 七時起。晴。午前、十時頃小谷、秋路、孝子及び予の四人、卯の花村よりがをん(文字不明)越をして黒瀬谷に入り本法寺に詣でて国宝の曼陀羅を見る。思ひしよりも藝術的價値高きもの。山門前の草に座して携へたる冷酒を酌み行厨を使ふ。折柄B 29一機天空高く飛び去るを見る。白雲悠悠たり。飯途聞名寺の太子堂に詣でて四時頃飯宅。流汗淋漓として大に疲る。今日郵便三通来る。去月廿八日京都より発せる速達漸く到着。先日速達未着と見え再び京都市募集歌の選者の依囑。晩食、配給の鯖味噌煮、馬鈴薯味噌汁、飯三椀。夜、例に依りて上水にゆきて裸浴。九時過就蓐したるに小谷氏、富山より戦災酒来れり、試飲せずやと言ふ。起きて試むるに、やや焦げ臭きもブランドーに似たる風味ありて棄てたものにあらず。先日暴爆に會ひて焼けたるもの、酒精分は十度位なりといふ。十時過再寐。この夜も蚤多く中々寐付かれず。

〔右欄外〕×藤井氏の初七日、讀經あり。

* 1 文藝春秋……「文藝春秋」昭和二十年三月号。清水基吉

の「雁立」は第二十回芥川賞受賞(昭和十九年下半年)。戦局の悪化に伴い、「文藝春秋」は四月より休刊(十月復刊)。

* 2 和田秀美堂……和田修美(一九〇〇〜六六)。八尾の古美術商。

八尾「甚六会」の一人。

* 3 藻谷銀河……富山の歌人・藻谷六郎(一九〇〇〜四五)。富山

大空襲で火傷を負い、八月九日没。歌集『仙人掌』がある。

* 4 曼陀羅……本法寺の寺宝「絹本着色法華経曼荼羅図」。

鎌倉時代の作とされ国の重要文化財に指定されている。「古寺に大曼陀羅を見にゆきしおもひでひとつ残し秋来ぬ」(『流離抄』)

【富山大空襲】

八月一日夜半から二日の未明にかけて、B 29の大編隊百八十二機が富山に襲来。約五十一万発の焼夷弾を投下し、市街地の九九・五%が一夜にして焦土と化した。死者二千七百十九人、負傷者約八千人、被災世帯約二万五千戸、罹災人口約十一万人。これは、広島・長崎への原子爆弾投下を除く、地方中小都市への空襲としては最も大きな被害である。³⁾八月一日はアメリカ航空隊の設置記念日に当たり、これに合わせて富山、八王子、長岡、水戸の四市への大規模爆撃が行われたのであった。

勇はこの大空襲を八尾の城ヶ山の山腹から目撃し、「その悲惨なる光景は、さながら地獄変相図を見るが如し」と

書き記している。文学者が日記に書き残した富山大空襲の記録はこれまで確認されておらず、富山の戦時史・地域史を語る上でも貴重な証言といえよう。勇の富山大空襲に関する記述はこの日記のほか、歌にも随筆にも見られない。勇は空襲の「悲惨なる光景」を歌にすることはなかった。

印象深いのは、三日に城ヶ山に登り焦土となった富山市街を遠望した折りの「自然の美しさと人生の醜さを対照して無量の感慨をおぼゆ」という一節である。城ヶ山からは、北に富山市街と富山湾、南に壮麗な立山連峰が眺められる。勇は立山をふり返り見て、「国破れて山河在り」の感慨を強く覚えたのであろう。同日の日記には、「結局本来の無一物にかへる時来れる也」と覚悟を決めたとあり、また六日の日記には、「応仁の乱など思ひ出でられて寂し」とも記されている。

この大空襲により、七月二十日から小谷家に同居していた契月の義弟藤井氏が亡くなっている。

八日 七時半起。今日も快晴。足痛し。朝食遅く九時を過ぎ。馬鈴薯味噌汁。午前、新聞を見るに、五日にはB29百三十機前橋、高崎を、更にB29百八十機今治、宇部、西宮を暴爆せる由。敵は「日本よい国神の国、九月十月灰の国」といへる宣傳ビラを投下せりといふがまことか。其水の「阜月晴上野朝風」「會津産明治組重」を讀む。句楽ものを集めしたるものを純世話物風に書いて見たし。午食、馬鈴薯ときな粉。午后、曇りて蒸し暑し。一時過警戒警報出でた

るもラヂオ通ぜず詳細不明。新七の「塩原多助」を讀む。四時頃より郵便局にゆき八雲書店に打電、川崎氏に寄りたる后鏡湯に入浴。夕刻、村君来る。藻谷氏の死は誤報にて不二越病院に入院、命には別状なき由。牛肉鐘詰、蠅除け等を貰ふ。晩食、馬鈴薯煮付、玉葱バター焼等。小谷氏より貰ひたる戦災酒小酌。夜、其水の「一刀流成田掛額」を讀む。九時半就寢したるも眠浅し。上園二回。

九日 八時起。今日も快晴。朝食、味噌汁一椀、きな粉一椀。午前、廣田壺中居来る。新聞を見るに六日廣島市をB29少数空爆、右は新型爆弾を使用、威力猛烈なりし由。皇軍戦力蓄積中といへど敵も新兵器を出し来りてその戦意や侮る可らず。村海老亭来る。昆布大豆等持参。午食、きな粉一椀。午后、前の乗山にて理髮。其水の「遠山櫻天保日記」を讀み明治座の舞臺を想起す。孝子宮田より鯖、皮はぎ、烏賊等を貰ひ来る。創元社金子氏より来状。「風土記」はまだ無事なる由。夕刻ラヂオは日ソの国交断絶、滿州にては既に會戰中、蘇機も滿州朝鮮に來襲せることを報ず。碁にして云へば最後の極め手にしてわが国は全く絶体絶命となれりと見るを至當とすべし。世界悉く敵。皇国をしてかかる危地に立たしめたるそもその責は何處にありや。予は敢て滿州国を作れる官僚の一部及びその背后にありたる軍部にありと言はむ。今回の戦争や蓋し国民の総意にあらざる也。晩食、鯖味噌煮、烏賊馬鈴薯うま煮、皮はぎ馬鈴薯味噌汁。戦災酒一飲。夜、川崎氏を訪ひ皇国の前途を語りて感慨。酒精酒を一飲の後九時頃飯宅。途上秋路君に會ふ。九時過就寢。眠安からず。

〔右欄外〕×鏡町に一間借りたる由。飾り棚三千円、茶筭筍五六百円の由。

十日 七時半起。離床直ちに若宮八幡に詣づ。国民を戦禍より救はれむことを祈願す。朝食、馬鈴薯味噌汁、飯三椀。午前、山の方へ疎開せしむる荷物を手傳ふ。午頃小谷氏と胡瓜の漬物にて戦災酒一飲。午后、午睡少時。荷物の片づけ漸く四時頃に了る。矢倉君より予が著書の小包三個到着。開き見れば概ね愚作のみにして心中落莫たり。今日は曇天なれど暑し。夕刻のラヂオは蘇軍樺太よりも越境中と報ず。新七の「名人長次」等讀了。夕刻より小谷君と鯖塩焼、鮎全、若芽味噌汁、鯨肉罐詰を肴に一飲。戦災酒の一級酒。夜、八時頃川崎氏来訪。九時頃晩食、飯二椀。九時半頃就蓐。夜半上圍。

〔右欄外〕×山へ送る荷物、小長持一個。土蔵へ入れたる荷物、行李二個。鞆二個。

十一日 七時半起。快晴。新聞の大本営発表を見るに、九日零時頃よりソ聯軍は東西より滿洲を攻撃、少数機も北滿朝鮮へ来襲。その前夜ソ聯は対日宣戦を布告せる由。その理由は戦争終熄の時期を短縮、犠牲の数を少くするにありといふ。猶機動部隊再現して釜石を砲撃、B 29は百機にて帝都周辺荻窪辺を、六十機にて福山市を焼燬。しかも皇軍は為すところなし。朝食、味噌汁二椀、飯一椀。午前、九時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。川端康成の「雪国」を讀む。佳作なれども「名人」の方数段上なり。手紙を書く。午頃小谷氏と胡瓜と酒粕味噌を肴に戦災酒小飲。明夜川崎氏を主賓として一酌せむことにす。午食、馬鈴薯。午

后、川崎、玉生両氏を訪ひ明夜の都合を聴きたるにとともに可なりとのこと。玉生氏宅にて上野氏に會ふ。近衛公より額用の書幅到着。「晩節」の二字。小谷氏所蔵の屏風を見る。物語風のもの、清水の図等中々おもしろし。川端君の「夕映少女」その他を讀む。面白からず。夕刻、上水にて體を拭く。胡瓜酢和へ、干鰯、等にて小谷氏と戦災酒一飲、遅れて秋路氏来り加はる。秋路氏より胡瓜を貰ふ。この男純情愛すべし。晩食、茶飯、椎茸清汁。十時近く就蓐。近頃夜上圍の癖つきたり。

十二日 七時半起。今日も快晴。新聞を見るに敵は再び長崎に於て新型爆弾を使用、その爆弾の威力は従来の戦争形式を一変せしむるほどのものなる由。九日B 29百機、尼ヶ崎、海南両市に來襲。蘇聯も豆滿江を渡りて北鮮に侵入、事態いよいよ最悪となる。しかもわが国の蘇聯に対する宣戦布告なきは何の故ぞ。何等か外交工作中なりと思はるれど如何。藻谷六郎遂に九日死去。朝食、茶飯二椀半、椎茸清汁一椀、味噌胡瓜。午前、藤村の「夜明け前」を讀み始む。平野源蔵氏来訪。牡蛎を貰ふ。午食、戦災酒一飲の后きな粉。午后、小谷氏の荷と共に小長持一個野積の農家へ送る。川崎氏を訪ひ帽子を貰ひたる后、秋路居に寄りて飯宅。午睡少時。夕刻より小谷氏、孝子と共に川崎、玉生両氏を誘ひて高島にゆく。川崎氏を主賓として招待せるもの。(診療の禮の意味)料理は鮎塩焼二尾、松島賊胡瓜酢のもの、口取、玉葱玉子どじ。松島賊うま煮、鯖照焼等。玉生氏持参の酒一升と戦災酒一升。九時過飯宅。松島賊うま煮にて飯二椀を食し十時過就蓐。秋路氏より鮎を貰ふ。

〔右欄外〕×平野氏より貰ひたる牡蛎を食せむとしたるに腐りみたりき。平野氏の評判頗る悪し。極端なる利己主義者乎。
十三日 七時起。今日も晴。新聞を見るに蘇聯軍は滿洲里辺まで進出、形勢吾に不利なるが如し。敵機は更に久留米市を焼爆。朝食、松島賊にて飯二椀半。午前、手紙を書く。午睡少時。「夜明け前」を讀みつつく。午食、きな粉二椀。午后、警戒警報出でたるも間もなく解除。再び午睡。再び「夜明け前」。煮豆を食す。四時頃高熊鉦泉にゆく。辰澤氏に會ふ。晩食、馬鈴薯玉葱茄子煮付、胡瓜、味噌等にて飯三椀。夜、川崎、秋路兩氏來訪。貰ひたる鮎を肴に一酌。予には戰災酒如何も工合悪く極めて小飲。十時頃就寢。今日は精靈盆にて常ならば磧にて盛んに迎へ火を焚くを例とすといふ。この夜よく眠る。

十四日 八時起。今日も引きつづいて快晴。新聞を見るに蘇軍は既に雄基、琿春、羅津、海拉爾、索倫、豊泉等に侵入。しかもわが国はいまだ蘇聯に對して宣戰せず。猶新型爆彈の使用は非人道なりとて抗議を提出せる由なれど、今更何の人道呼ばはりぞ。外交のへろへろ腰には呆るるの外なし。朝食、飯一椀味噌汁一椀、きな粉一椀。午前、九時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。藤村の「夜明け前」を續讀。やはり藤村は巨匠也。新片町時代の先生を想起す。午睡少時。午食、馬鈴薯味噌煮。辛し。午后、八雲書店飯田氏より原稿未着の報來りたれば、直ちに再稿の作成に着手。夕刻までに大体の編輯を了す。廣島にて敵の使用せるものは原子爆彈らしく、威力二里四方に及び、その中心部一里四方の人畜は悉く死すといふ。竹槍、唐手術などを以て對抗

せむとするは痴呆に近し。晩食、馬鈴薯玉葱バター入り汁、玉葱バター焼、干鰯、飯二椀半。夜、上水にゆき半裸浴。ラヂオは明日十二時重大放送ありといふ。戦局に関する事ならんも、如何なること乎。十時頃就寢。眠れず。

〔左欄外〕×「神杉」

十五日 零時半頃空襲警報出づ。敵数機富山湾に来れるもの如く、数回爆音の轟くを聴く。二時頃解除となりて再寐。八時起。今日も晴れたり。腹工合猶面白からず。朝食、野菜汁、干鰯、飯二椀。午前、十時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。「神杉」再稿のルビ振りを了る。正午らじおより流し出し来れるは陛下御親讀の詔敕にして、哀調を帯びたる玉音にて、共同宣書受諾の旨を述べさせ給ふ。大御心のほどを思へば涙なしには聴き奉る能はず。陛下をしておんみづからかかる大御言葉を宣らし給ふこと前代未聞、側近及び補弼の者共が袞龍の袖に隠るるの不忠不義は、断じて許しがたきところと言ふべし。日本国は遂に本土、九州、四国、北海道に狭められて、明治維新後の覇業遂に空し。軍部及び要路の者、何の顔かあつて皇祖の靈に見えむとするや。宜しく屠腸して以て罪を闕下（*）に謝すべき也。午食、僅かにきな粉の汁一椀。午后、今さら何の決戦歌集ぞ。「神杉」の原稿を破却して黙想すること多時。川崎氏を訪ひて少時會談。笹餅をもらひて販る。千葉の父の靈前に、小谷氏より貰ひし牡丹餅と笹餅を供ふ。「夜明け前」を讀みつつ午睡少時。酒の配給二合来る。冷奴、卵の花と共に酒一盞を佛前に供ふ。夕刻、上水にゆき體を拭ふ。七時の放送は阿南陸相の自刃を傳ふ。和田秀美堂君に會ふ。予二

合、小谷氏三合、配給の酒を持ち寄りて一酌。僅かに敗戦の鬱を慰む。晩食、卵の花、冷奴、牡丹餅三個。午后に笹餅一個、牡丹餅二個を食したる后なれば遂に飯に及ばずして止む。十時頃就寢。

〔玉音放送全文「詔書」新聞記事の貼込み〕

十六日 八時起。今日も晴。朝食、味噌汁卵の花にて飯二椀。腹工合ややよし。午前、「夜明け前」を續讀。揮毫、玉生氏の短冊五枚。出来わるし。午食、米團子、笹餅。午の放送何ごとをも傳へず。敵機猶來襲を止めず、何の故ぞ。午后、午睡少時。「夜明け前」を讀む。手紙を書く。四時頃鏡湯にゆきたるも休み。庚申湯に入りて飯る。八雲書店より歌集「神杉」到着の旨打電し来れるも今は詮なし。晩食、味噌胡瓜、馬鈴薯入り味噌雑炊四椀。夜、孝子と共に散歩、玉生氏に短冊を届け、川崎氏を訪ひたるも手術中、會はず飯る。月半輪の良夜なれども、亡国の悲愁かへつて深し。九時過就寢。この日放送は東久邇宮に組閣の天命下りたることを報じたる由。皇室を楯とする大官等の不忠言語に絶す。蓋し止むを得ざるに出づる歟。

* 1 雄基、琿春、羅津、海拉爾、索倫、豊泉……旧満州の地名。

* 2 袞龍の袖に隠るる……天子の威徳（袞龍の袖）の影に隠れ、勝手な振る舞いをする事。

* 3 闕下……天子の御前。

【終戦・幻の決戦歌集『神杉』】

八月十五日、勇は仮寓先の小谷契月居で終戦を迎える。玉音放送を聴いたのは、ちようど八雲書店から発刊予定であった決戦歌集『神杉』の再稿ルビを振り了えた直後のことだった。その午後、勇はすぐさま出来上がったばかりの『神杉』の原稿を、「今さら何の決戦歌集ぞ。」と破却する。幻となった歌集『神杉』（初案「星雲」）については、その題名も含めて、今回の「續北陸日記」の翻刻により初めて出版計画が確認された。八月二十七日付（消印）正岡容宛の書簡により、『神杉』は「かんすぎ」と読むことがわかつている。七月三十日の日記の記述からは「六十四頁」「旧作自選」の予定だったことが窺えるが、詳細は不明である。

八雲書店から発刊される予定だった「決戦歌集」叢書については、齋藤茂吉の『萬軍』が知られている。終戦に伴い八雲書店からの『萬軍』の刊行は見送られたが、原稿はすでに出版社に渡っていたため、茂吉の没後に思わぬ形で世に出ることになった。『萬軍』には題そのままに、戦意高揚を目的とした調子の高い歌が並んでいる。この叢書がそのまま刊行されていたならば、茂吉にしても勇にしても戦後さらに厳しい戦争責任の追及を受けていたかも知れない。

「決戦歌集」にははつきりしない点も多いが、「續北陸日記」後半の八月二十四日には、八雲書店から早速で「決戦歌集」を止め「新日本歌集」として出す由との知らせが届いたことが記されている。このことから考えると、戦後まもない時期に「新日本歌集」を刊行した十一名の歌人

たち——齋藤茂吉・吉井勇・川田順・土岐善麿・吉植庄亮・結城哀草果・佐佐木信綱・齋藤瀏・下村海南・釈迢空・岡麓らが、「決戦歌集」叢書の主だったメンバーであったとみてよいだろう。勇は破却した『神杉』の代わりに、「新日本歌集」叢書の一冊として歌集『金泥』（昭和二十年十一月、五十四頁）を刊行している。疎開以前の京都時代の歌を集めたこの『金泥』から、勇の戦後は始まるのである。

『金泥』の巻末には「巻後に」としてただ一首、八尾で詠まれた次の歌が収められ、この歌集が八尾の地で編まれたものであることを物語っている。しかしこの歌は、『吉井勇全集』第三巻の解説文に引用されているのみで、『金泥』には収録されていない。

われすでに鬢白めども三越路の中つ國邊にやはか老いめや

昭和乙酉初秋越中八尾の客舎に於て 吉井勇

【註】

〔1〕『私の履歴書 文化人1』（昭和五十八年十月、日本経済新聞社刊）所収。初出は、「日本経済新聞」昭和三十二年四月十日〜二十三日。八尾疎開時代については、四月二十日の連載⑩「越中から洛南へ」に書かれている。

〔2〕北日本新聞社編『富山大空襲』（昭和四十七年三月、北日本新聞社刊）による（18頁）。

〔3〕前掲の北日本新聞社編『富山大空襲』、および北日本新聞社編集局編『あの日の空とやま戦後70年』（平成二十八

年一月、北日本新聞社刊）を参照。死傷者数などはいまだ「未確定」のままである。

〔4〕昭和二十年八月二十七日付（消印）正岡容宛吉井勇書簡の中で、次のように歌集名にルビが振られていることを確認することができた。「決戦歌集叢書、新日本歌集叢書となり、従って小生の歌集の題「神杉」を「金泥」と改めました。」（県立神奈川近代文学館所蔵）

〔5〕秋葉四郎『茂吉 幻の歌集』萬軍 戦争と斎藤茂吉』（平成二十四年八月、岩波書店刊）に歌集成立の背景と全歌の詳細な検証がある。

〔6〕田坂憲二は吉井勇宛川田順書簡の翻刻をもとにした論考「吉井勇と川田順——昭和二十年前後の書簡を中心に——」（同志社大学人文科学研究所「社会科学」第四六巻第四号、平成二十九年二月）の「五 書簡から窺える出版社の状況」の中で、戦後の「新日本歌集」は「決戦歌集」からの「焼き直し」だったのではないかと推測している。「續北陸日記」の記述はこの指摘を裏づけるものである。

【付記】

*本稿は、科学研究費学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般）17K2457）による研究成果の一部である。

なお、本稿執筆にあたって、林秋路氏の二女・林淑子氏、京都府立京都学・歴史館の大塚活美氏、高志の国文学館の綿引香織氏、県立神奈川近代文学館の藤木尚子氏、北日本新聞社の近江龍一郎氏より、資料提供をはじめとする懇切なご教示・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。